

アンソロジー
anthology

ね む
合 歡

Vol. 15



2015 冬

はじめに

主宰 富阪宏己

目次

ものの芽の	石井宏幸	4
ひかり	井上悦男	6
秋思	植田桂之	8
明易し	梅田光憲	10
老いの身	大戸 稔	12
旅先での思い出の句		
	尾形松子	14
秋の蚊	桜本滋子	16
時鳥草	角南房子	18
秋日傘	高城登代	20
平成27年・夏	富阪宏己	22
花の雲	鳥越 棼	24
ポラリス	名木田純子	26
木の葉散る	信里由美子	28
吉報	蓮岡健美	30

雪割草	真木好子	32
冬日向	三宅 進	34
秋霖	山下祐子	36
初体験	與田武彦	38
生まれけり	米元ひとみ	40
嫁がせて	渡辺牛二	42
編集後記	渡辺牛二	44

はやいもので、脳梗塞の発作を起こして二年半が過ぎようとしていきます。いまでもフラつきがあり都会の道路を一人では歩けません。又、神経細胞の死滅による記憶障害との闘いも大変です。こんな状態ですが、渡辺牛二さん、米元ひとみさんを始めた役員、会員の方々のご尽力により、会は生き続けております。しかし、句会も主宰が主席出来ないので限定されたものになっています。会のあり方について考える時が来ています。

ひとつは、合歓の会の会員対象の個人句集の発刊を考えています。今年のはじめごろから思っていました。第一回配本予定の主宰が記憶障害の関係で発刊出来ないまま年末になつてしまいました。来年はじめには必ず出そうと思つていきます。

この他、現状の会にあつて実現可能な思案について、お聞かせください。

今は私にとつても、会にとつても試練のとき、頑張りたいと思つています。

ものの芽の

石井宏幸

句碑を芯とし万緑の始まりぬ
雨の街映す歪みも金魚玉
すれ違ふ風に残暑の日の匂ひ
双葉より遠き日育て牽牛花

この半年ほど、十月に二十五歳になったばかりの二男と月に一度か二度吟行に出かけている。必ずラーメンを奢ることもあり、誘えば着いてくる。季題を教えつつ、何を景から感じるかを聞き出し、その言葉を推敲してゆく過程を粘り強く示して、やっと二、三句を得る。その大切な句は地元の俳誌「旭川」の春秋集に投句し、平春陽子先生の選を受けている。地元に戻ってきて就職したのだから、親として伝えられることを伝えたい。

永久といふ像の淋しさ冬の雨
マフラーにうづめて何か失ひぬ
犬増えしそれも真中にして賀状
温床に大きな空の貼り付ける
杭といふ淋しさ鳩と重なれる
ものの芽の光組み上げゆく未来

子と追ふは遠き日を追ふ冬の蝶
宏幸

ひかり

井上悦男

新茶買ふあなたが来るの今日二時に
裸の子ほれそれこれと追ふ媼
夕べ咲く今朝咲く花や庭の夏
時折の風にひと息秋きざす

誰にでも優しいそぶり秋桜
カーテンを引けばピンクの秋桜
コスモスの白より生るる雲の影
地平線より一面の花野かな
ちらと笑む赤子の匂ひ小鳥くる
日溜りの小春のやうな赤子抱く

秋思

植田桂之

ちちろ虫鳴くや厚めの掛布団
夕間暮ただ虫の音と波の音
あてもなく車走らす秋日和
稜線の空に切り込む秋日和
秋の暮渚を歩くシルエット
黄落や遠近法の並木道
手の甲の血管見入る秋思かな
石段に落ちて団栗ソファミレド
遊歩道駆くる落葉に追ひ抜かれ
無人駅過ぎてしばらく枯野中

明易し

梅田光憲

病窓に耳疑はぬ初蛙

ガン細胞五月に入りて成敗す

術後四日目五月五日の放屁かな

チクバ外科より欠席投句せし立夏

思ひ出を手繰る遅日の紐尽きず

退院のその日の空や明易く

烏賊蛸も駄目と言はれて退院す

退院に安堵の麦茶一気飲み

白きより白きヘナース更衣

甚平に術後の手足細きかな

ガンの手術をはじめ、今年
はいろいろな大変な年でした
が、しぶとく生きて俳句を楽
しんでおります。

毒舌を自他ともに認めてい
る小生ですが、「眩しきは恋
する二人さくらんぼ」のよう
に、やさしさも句に詠めるよ
うになりました。

これも病に見舞われた所為
でしょうか。

老いの身

大戸 稔

無人駅つゞく伯備や若葉映ゆ
解け込むや空の青さに花林檎
春潮や島のゴルフに弾みをり
身寄り減る故郷の深夜ホトトギス

歌に訪ふ師の碑沖差す梅雨の瀬戸
遠蛙 日記家計簿開く刻
盆おどり由緒ある曲城下町
鳴く順序違へし蝉や八十を生く
病む妻に未曾有の炎暑やつと終ふ
老いの身につよき酒の香秋彼岸

旅先での思い出の句

尾形松子

逆光の運河のひかり土筆生ふ
びわ湖の辺色なき風に身をまかせ
早朝の琵琶湖周遊涼新た
野鳥くる枝垂桜を遊び場に

最初の一句、富阪先生に秀逸の一句としてお選びいただき、嬉しい年はじめでありました。
今回は旅先での残しておきたい思い出の句と、ひとり吟行では、なかなか行けぬ場所での句を選んでみました。
しばし、日常生活から離れ一人静かに黙考、自然との対話の中から、これほど思える句の生まれたい喜びは、なにもにもかえがたい瞬間であります。新聞への投句をもう少し増やし、今現在の心境を日記がわりにも思える程、作句

藤波の肩まで届く香りかな
薔薇を愛でその香の中に邂逅す
あぢさゐや宝号唱へ足鍛へ
砂漠めく熱砂の中をひた歩く
さまざまな貝殻拾ひ夏休み
天高し乗馬の親子振り返り

したいと意欲を燃やしています。

秋の蚊

桜本滋子

秋の蚊に水琴窟の音やいかに
秋の蚊の眉毛に隠れさうになり
秋の蚊と日陰をせめぎ合ふ城址
秋の蚊の鼻の頭に止まるとは

吟行に行くときとゆっくり歩いて一寸立ち止まり、一句を組み立てる言葉を探す。ばつとひらめけば良いが、少し考えていると声も出さずに忍者のように近づいてくる秋の蚊。
痒くなって刺されたことに気がつく。スカートをはいている人は、たちまち標的となる。そういえば吟行に行くようになって以来、スカートをはかなくなつた。
それでも秋の蚊は、私にとつてなにか憎めない俳諧味のある、気になる存在である。

秋の蚊に聴力検査されてをり
秋の蚊に車の中で待たれをり
秋の蚊の黙つて主張する痒さ
秋の蚊に責め立てられてゐる句作
秋の蚊の忍びの術に刺されけり
雨宿りして秋の蚊に捕まりぬ

まるつきり毛嫌いすることも無いが、愛する程でもない。緊張感のある関係を句に表現して楽しんでゐる。
今ふつと右手の甲を見ると二か所赤くなつてゐる。見つけると思ひだしたように痒い。
こんなに寒く、暦では冬になつてもまだ老いて頑張つてゐるのだ。
夕方になつたら、忘れないように蚊取り線香をつけることにしよう。

時鳥草

角南房子

初蝶の眩しさにすぐ見失ふ
沖をゆく白亜の船や春立つ日
水音に岸边ふくらむ名草の芽
藤の花風の遊べる丈となり

夏の月夜汽車は海を渡りけり
風鈴の風の音色を選びけり
苺摘む朝の光を摘むやうに
晩鐘の夕日に染まる秋通路
爽やかに齒より挨拶こぼれけり
一輪に茶室となりし時鳥草

秋日傘

高城登代

雷光のL字に曲がり消えにけり

牛小屋の牛居らぬまま二度の秋

しばらくは美しき庭なり黄鵲鴿

飼ひ猫の口内炎や秋めいて

ニ―チェふと過りて秋の日傘かな

朝夕のあな優しきや秋の蝉

旅の宿更けゆく程に虫の宿

白障子座敷にうつす長話

小白鳥鳴いて着水落ちつかず

初しぐれ恋の百歌を写しけり

平成27年・夏

富阪宏己

青葉して青葉緊張してをりぬ
六月の紫がかかる夜なりけり
小雨降る静かに草を抜きてをり
標本となるより火蛾の美しく

平成27年の夏を、わたしは無事に乗り切れるだろうかと思っていた。
脳梗塞の症状のひとつひとつが、紛れもなく脳から来ていることを実感できた夏でもあった。
際限なく出る涎にしても、足の麻痺にしても、認知機能の衰えにしても。
この時期に作った俳句から、十句を選んだ。
俳句を作るのは大変だったが、出来た句が罹病前より劣っているとは思っていない。

片陰にゐてそよ風と思ひけり
殺風景てふ涼しさの館に入り
扇風機似合ふカフェの広さかな
冷房の固まつてきし正午かな
冷房や千の書籍の端座して
噴水や出し切つてなほ出し切つて

そう自負している。
出てくる言葉は、嘗ての半分にも満たないが、祈るようにして作った俳句である。

花の雲

鳥越 禁

花の雲上田城址の堀を染む
残雪のまだらも美しき浅間山
端正な高山陣屋緑立つ
席に待つ葵祭の路頭の儀
汐待ちの港涼しき風の路地
東西に別れ乗り継ぐ夜の秋
一線の天橋立秋晴るゝ
銅山の栄えし山路秋惜む
冬晴や菰巻く松の縄目美し
白壁の卯建の家並小六月

ポラリス

名木田純子

パートナーはやさしき風や踊子草
ハイタッチしてすれ違ふ蟻の列
卓涼しアロマキャンドル揺らめけり
碧眼の言葉涼しきアクセント

稲の香を搔き混ぜオートバイ駆くる
落葉踏むスポーツマンの音であり
天帝のプレゼントかも帰り花
ポラリスを標に辿る枯木宿
窓暮れてグラスにメリークリスマス
ラグビーや暮色の中のノーサイド

木の葉散る

信里由美子

冬近しかさりかさりと大地踏む
焚かれゐる山気を纏ふ落葉かな
風入れてよりの炎や落葉焚
落葉踏みいつしか山の黙に入る

晩秋や楽譜にならぬ山の声
木の記憶剥がせしやうに木の葉散る
森ひとつ大気に透けてもみづれり
山茶花の散り継ぐ先を咲きつぎて
朱き実の森を寒禽啼きやまず
葉籠りに青き艶秘め竜の玉

吉報

蓮岡健美

豆の飯京焼茶碗に畏まり

ドリップの落つるコーヒー著莪の雨

梅雨深しポツンと残る庭祠

雲海のそのまた遥か富士浮かぶ

流木の乾ききつたる残暑かな

祖母遠く想ひ出近し衣被

靴先に山気澄みたる岩ききやう

地下足袋の足取り軽く松手入

入選の吉報ありし文化の日

初冬や喪中の人に書く便り

雪割草

真木好子

雪割草ひそと並びて売られたる
摘み呉るる手より香れり芽山椒
薔薇挿せば水もグラスも輝けり
園児らの声が野辺まで揚雲雀

生きてゐることの喜び風薫る
見霽かす倉敷の町春惜しむ
地の底の声とも聞けり夏の虫
好物へひたすら夜を蛞蝓
立ち止まり聞く松虫の音色かな
色浅く桜紅葉の散り急ぐ

冬日向

三宅 進

雲流れ侘しさつのる秋の暮

冬霧の中より現るる人の影

冬雲雀暖かき日は空に舞ふ

冬日差す部屋に隠りてのんびりと

徒然に句作りはげむ冬日向

裏側の小窓にともる秋灯

名月を待ち侘びながらうとうとと

気がつけば我が衣に止るキリギリス

遠くより讚美歌聞こゆ敬老日

コスモスに引き寄せられて人集ふ

秋霖

山下裕子

暮れ残る二百十日の波閑か
赤げらを見てこの道を好きになり
山狭は日の出遅かり晩稻刈る
蔦紅葉昏く眠れる昼のバ―
秋深し背に迷ひなき調律師
秋霖や閉ぢて久しき時の鐘
秋雨の苔に結びし千々の玉
椋鳥一群飛び立つ空を震はせて
団栗の降る踏まぬやう当たaraぬやう
二人みて感じる孤独木の葉髪

初体験

與田武彦

修善寺の卯の花腐し湯のけむり

草刈は休み休みの仕事かな

絶景や元気に歩く夏の山

赤とんぼ風に向つて何してる

桃色の娘のやうな芙蓉かな

目をつぶり聞こゆる音は秋になり

雨降や白さが似合ふ葦の花

長月やゆつくりした日何もなし

神棚の古酒を頂く良き日かな

行秋や我救急車乗せられし

今年の初夏には中学時代の幼友達と伊豆地方の二泊三日のバス旅行で楽しい時間を初体験し、晩秋には急病人で救急車に乗せられ、病院暮らしの苦しい初体験をするという忙しい年になりました。

生まれけり

米元ひとみ

生まれけり冬満月のあかるさに
初空へ産着の白のひるがへる
赤ん坊のたそがれ泣きに日脚伸ぶ
赤ん坊のあくびしやつくり蝶の昼

赤ん坊の眠る気のなき日永かな
晴れあがる風の青さや鯉幟
青蜜柑へとはひはひの一目散
小鳥来るつたひ歩きの素早さに
人見知りする子の触る落葉かな
まんぷくの赤子重たき小春かな

孫はもちろん可愛い、一生懸命育てている我が子がなにと愛おしい。健やかに育てと願うばかりである。手を叩けば真似をして手を叩く孫は天才ではないかと思える。よその子と比べて一喜一憂していた我が子育ての愚かさを反省している。ものが言えるようになったら、野原を歩いて一緒に俳句を詠みたいとバアバは夢みている。

「バアバは俳句を詠めというからキライ！」と言われそうではあるが、。

嫁がせて

渡辺牛二

店先の皿に足留む秋日和
白無垢のわが娘可愛や秋扇
コスモスの映りし水の真つ平
フアインダー中に婿どの秋の空

阿智神社に吟行に行くと、時々花嫁さんを見る事があります。その度に、その幸せそうな姿に自分の娘を重ねて羨ましく思っていました。出来れば我が娘にもこういう所だと、お賽銭を奮発して二拍手に思いを込めた事もありました。御利益ですね。娘が阿智神社で式を挙げてくれたのですよ。まさかねえ、現実になろうとは、正直思っていないませんでしたよ。

かきわけし人に噴きだす秋の汗
天高し二人に幸の多かれと
大木の下に日の斑の黄落期
式開始待つ間の遠く秋の蝉
我が影の我に従ひ秋夕日
嫁がせて後の気怠き秋思かな

これからは吟行の度にお参りとお賽銭を欠かさないようにします。です、もう一人、息子にも良いお嫁さんが来ますように。

◆七月二日、術後の梅田光憲さんが出てこられると聞いて児島の句会へ寄せてもらいました。三年ぶりでした。成績は散々でしたが、懐かしい皆様にお会い出来て、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

◆光憲さんはご自身の今号の句にあるように、手足は多少細く感じられました。思いの他お元気で、次々と名乗られるその姿からは、とても術後とは思えませんでした。

◆元気付けるつもりで行って元気を貰い、その上お土産まで頂いて、何が目的だったか分からなくなっていました。まだお礼を言っていないので、この場を借りて、お礼申し上げます。

◆半年あれば、良い事悪い事、いろ

いろありますね。毎号のことですが、皆様お元気で原稿をお寄せ頂けるだろうか、不安に駆られながら編集作業をして行きます。

◆そして、有難うございます。休まれた方もありますが、今号も多くの方から原稿をお寄せ頂き、こうして無事お届けする事が出来ました。

◆俳句にも文章にも皆様の半年の間が感じられて、良いアンソロジーになったと思っています。

◆これからまた半年、一步一步で良いのです。元気を積み上げて行きましょう。そしてまた、素敵な十句と文章をお寄せ頂きますよう、お願い申し上げます。

◆最後に一句、児島の句会で点の入らなかつた句です。

不屈なる頑固爺さん大南

(牛二)

アンソロジー合歓 Vol.15

平成27年12月25日発行
 発行 合歓の会
 発行責任者 富阪宏己
 印刷 大友出版印刷
 大阪市生野区

連絡先
 〒701-0304
 岡山県都窪郡早島町早島 3991-144
 富阪宏己方

次号締め切り
 平成28年 6月30日
 原稿送付先
 〒708-0015
 岡山県津山市神戸 719-7
 渡辺牛二
 Email : info@nemunokai.net
 Tel. : 090-8710-7067